

観光フォーラム

紛争地における観光

—イスラエル・パレスチナ旅行の体験から

Tourism and peace in an area of conflict: My experience in Israel and Palestine

岩安 良祐

Ryosuke Iwayasu

和歌山大学観光学部

I. はじめに

「イスラエル」・「パレスチナ」と聞いてどのようなことを思い浮かべるだろうか。人によって様々だろうが、「宗教」や「聖書」、「紛争」などの印象が強いのではないだろうか。テレビや新聞を見ている、「旅バラエティー」でとり上げられる楽しい場所というよりも圧倒的に「国際問題」という扱いのほうが多く、後者のイメージが一般的であると思われる。

私は、高校で世界史を学んで以来中東地域に興味を持ち、特にイスラエルとパレスチナの間の紛争、いわゆる「パレスチナ問題」への関心から、この地を旅してみたいと考えてきた。この積年の夢を叶えるべく、大学の長期休暇を利用して、2018年3月29日から4月5日までの間、イスラエル・パレスチナを訪ねた。

イスラエル・パレスチナは、旧約聖書（ユダヤ教では「タナフ」）に登場する地であり、以来長きにわたり宗教だけでなく、政治・民族の興亡や紛争など世界に影響を与える大きな潮流を見つめてきた地である。また、近年ではパレスチナ問題のゆくえが国際的な注目を集め、各国が解決や利権のために様々な議論を行っている。とくに2017年にドナルド・トランプ氏がアメリカ大統領に就任して以降は、情勢は悪化したように見える。2018年には、アメリカが国連（国際連合）パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）への拠出金の半額以上を凍結し、さらにはアメリカ大使館をエルサレムに移転したことにより、イスラエルやアメリカに対するパレスチナ人の不満が高まり、抗議活動やイスラエル軍との衝突が起きている。

そうした複雑な事情を抱えるこの地の観光に関して、2017年に2つの興味深いニュースを目にした。その1つはパレスチナ問題を主題にしたツアーがあること（太田, 2017）、もう1つがパレスチナ問題を題材にデザインしたホテルがオープンしたことだ（共同通信, 2017）。

パレスチナにつきまとう紛争というイメージは、同地区の観光客の入り込みにもマイナスに作用している（高松, 2015）。それにもかかわらず、観光客を引き寄せる上で不利に働きか

けかねない紛争というテーマを正面から扱った観光の形態があることに驚きを覚えた。そして、不安定な情勢で紛争のイメージがつきまとっているこの地で、実際に観光がどのように行われているのかに興味を持った。また、ときに「観光は平和へのパスポート（Tourism, Passport to Peace）」と言われるが（UNWTO, 2018）、紛争地での観光が本当にその場所の状況をよりよくし、平和に貢献しているのかを確かめたくなった。以上の理由により、そして何より複雑な事情を抱える聖地の雰囲気をも自分自身で体感するため、前述の通りイスラエル・パレスチナへ旅に出た。

以降では、イスラエル・パレスチナの地域的特徴を概観し、そこに実際に訪れて自らが体験したこと、そしてそれらをふまえて考えたことを述べていく。

II. イスラエル・パレスチナはどのような場所か

イスラエル・パレスチナは、北はレバノンとシリア、東はヨルダン、南は紅海とエジプト、西は地中海に面している。歴史的にはイ

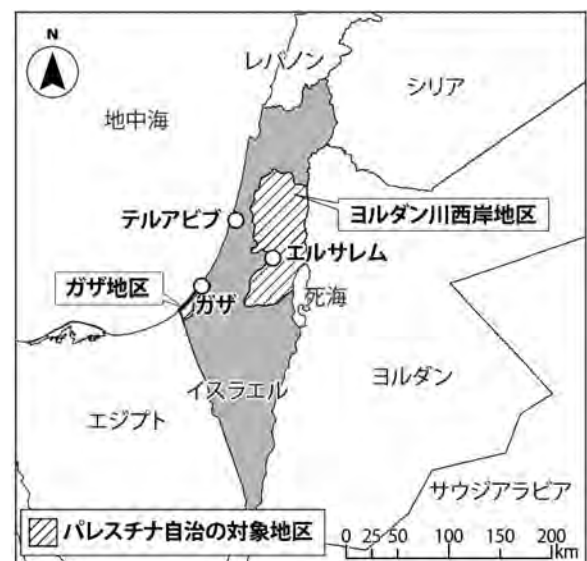


図1 イスラエル・パレスチナ周辺地図（筆者作成）

イスラエルとパレスチナは同じ地域を指すが、他地域との明確な境界はなかった。現在この地域には「イスラエル国」と「パレスチナ自治区」という二つの行政区分が存在する。パレスチナ自治区は2カ所に分かれており、ヨルダン側にある方を「ヨルダン川西岸地区」、地中海側にある方を「ガザ地区」と呼ぶ。

この旅行の主な舞台となるエルサレムとベツレヘムは、宗教の聖地として知られている。エルサレムはユダヤ教・キリスト教・イスラームという3つの宗教の聖地として、またベツレヘムはイエス生誕の地として、昔も今も多くの巡礼者や観光客が訪れている。この2つの場所は、南北に10kmほどしか離れていないが、エルサレムは現在イスラエル政府によって統治されており、一方のベツレヘムはパレスチナ自治区のヨルダン川西岸地区に位置し、パレスチナ自治政府の統治下にある。

つぎにイスラエルとパレスチナの面積や人口、民族、経済状況の概要をみていく。これらの情報は、日本の外務省の「イスラエル基礎データ」と「パレスチナ基礎データ」を参考にして、表1にまとめた。

表 1 イスラエル・パレスチナの基本情報

	イスラエル国	パレスチナ
面積	22,000km ²	6,020km ² (西岸地区: 5,655km ² 、 ガザ地区: 365km ²)
首都 (自治政府所在地)	エルサレム	ラマツラ
人口	868 万人	495 万人 (西岸地区: 300 万人、ガザ地区 194 万人) ※パレスチナ難民数は 587 万人。
民族	ユダヤ人 (75%)、アラブ人・ その他 (25%)	アラブ人
言語	ヘブライ語、 アラビア語	アラビア語
宗教	ユダヤ教 (75%)、イスラーム (17.5%)、キリスト教 (2%) など	イスラーム (92%)、キリスト教 (7%) など
通貨	新シェケル	自国通貨なし (イスラエルシェケルを使用)
経済成長率 (実質 GDP 成長率)	3.8%	4.0%
失業率	4.8%	26%
1 人あたり GDP	35,343ドル	2,781ドル

面積については、イスラエル、パレスチナともに日本に比べて小さい。イスラエルの面積は日本の四国に相当する広さで、パレスチナも、西岸地区が三重県とほぼ同じ、ガザ地区は福岡

市よりやや広くなる。イスラエルの国土には東エルサレムとゴラン高原が含まれているが、これは国際的に承認されていない。首都についても、イスラエルはエルサレムとしているが、多くの国がこれを認めていない。またパレスチナ自治政府の所在地はラマツラであるが、首都として東エルサレムを掲げている。人口は、イスラエルが 868 万で、パレスチナはそのおよそ半分の規模である。民族については、イスラエルではユダヤ系が全体の多数を占め、アラブ系やその他の民族を含む。パレスチナではアラブ系が多い。このような民族構成は、使用言語や宗教に反映している。イスラエルではヘブライ語が主に使われ、一部でアラビア語が使われている。信仰されている宗教はユダヤ教が多く、ムスリムやキリスト教も含まれる。一方、パレスチナの主要言語はアラビア語で、宗教はイスラームが中心である。経済的には、1 人あたり GDP に大きな違いがみられるように、イスラエルとパレスチナ間の格差が大きく、失業率はパレスチナ側のほうがはるかに高い。通貨は共通で、パレスチナ経済がイスラエルに依存しているという実態の片鱗がうかがえる。

ここからは現在のパレスチナ問題とこれに関わるイスラエル・パレスチナの歴史の概要を、白杵陽『世界史の中のパレスチナ問題』(2013)と立山良司『エルサレム』(2001)を参照して説明していきたい。

「パレスチナ問題」とよばれるユダヤ人とパレスチナ人の間の紛争は、宗教間の対立という側面から語られることが多いが、この見方はパレスチナ問題について誤解を招く恐れがある。白杵 (2013) によると、この紛争の基底にあるのは、「パレスチナの地にイスラエルというユダヤ人国家が建設され、そのためパレスチナの地から離散を余儀なくされたパレスチナ人の離散の問題」である。つまり「領土をめぐる政治問題」(白杵, 2013) が両者の紛争の本質だというのである。そこで「宗教」が問題にされるのは、それぞれの宗教の「共同社会 (教団)」の立場から政治問題を宗教的側面から正当化する傾向があるからだ。白杵 (2013) は述べている。

現在イスラエル・パレスチナと呼ばれている地域は、かつて「カナン」とも称され、聖書においては「神がアブラハムとその子孫に与えると約束した地」と記されている。この地に住んでいたヘブライ人¹の一部はエジプトへ移住したが、エジプトでは過酷な奴隷生活を強いられた。こうした状態にあったヘブライ人が、紀元前 1280 年頃にモーセに率いられてエジプトを脱出し、シナイ半島に逃れた。その山頂で、モーセは神から十戒を授けられた。

カナンの地に戻ったヘブライ人は、統一王国を建て、ダビデ王・ソロモン王の統治のもとで栄えたが、紀元前 927 年のソロモン王の死後に国は分裂した。分裂後南にあったユダ王国は新バビロニアに征服され、住民の多くはその都バビロンに連れ去られた。ここでヘブライ人は唯一神ヤハウェへの信仰を固く守り、やがてユダヤ教の基礎となる信仰を築いていった。

ユダヤ人はバビロンから解放されたあとに自治権を獲得したものの、ペルシアやギリシアの支配下に置かれた。紀元後 66 年から 73 年のユダヤ戦争²でローマに敗れたのちにユダヤ人の離散が始まり、パレスチナの地ではユダヤ人は少数派となった。

7 世紀にイスラームが成立し、勢力を伸ばした後はパレスチナもイスラーム帝国の支配下に入った。以降は様々なイスラーム王朝がこの地で興亡を繰り返し、イスラーム帝国は異教徒に寛容な政策をとり続け、礼拝や自治の自由が認められたため、三宗教の聖地が集まるエルサレムでも、ムスリム、キリスト教徒、ユダヤ教徒が共存できた。また、共存できた他の要因として、ユダヤ教徒にとって信仰上聖地の場所を占有すること自体には意味がないとされてきたことも挙げられる。一方、中世ヨーロッパではキリスト教徒によるユダヤ教徒の差別・迫害が起こっていた。当時のキリスト教の教義がユダヤ教に否定的だったことや、ユダヤ教の儀式がキリスト教徒の目に怪しく映ったためと考えられる。

近代に入り、現在のパレスチナ問題に直接関係する事件が起こり始める。フランス革命以後、ユダヤ教徒はキリスト教徒と同様に政治に参加できる権利（いわゆる市民権）を得たが、1894 年のドレフュス事件³をきっかけにシオニズム運動⁴が盛んになった。当時は多くの地域でナショナリズムが高揚した時期であり、こうした状況の中でシオニズム運動は大きな盛り上がりを見せ、このころからユダヤ人によるパレスチナへの移住・入植活動が始まった。

そして第一次世界大戦中（1914 - 1918 年）にイギリスがアラブ人に独立国家を約束する一方で、フランスとは戦後の中東分割を検討し、ユダヤ人に対しては国家建設を認めることを示唆した。このように三方に対して相反する方針を示す「三枚舌外交」とよばれる施策をとった。戦後パレスチナはイギリスの委任統治領となったが、アラブ・ユダヤ両民族はパレスチナでのそれぞれの主権を主張し、現在まで続くパレスチナ問題が始まった。これは、それまではなかった新たな「アラブ対ユダヤ」という民族対立を創出した。

1930 年代にはナチスによるユダヤ人への迫害が激しくなり、こうした状況はナチスによる連合軍への降伏まで続いた。この影響によりユダヤ人のパレスチナへの移住・入植が増大した。そのため、先住しているパレスチナ人と新たに移り住んできたユダヤ人との間に土地をめぐる争いや衝突が起きようになった。イギリスはこの問題に対する措置を国連にゆだねたが解決には至らなかった。

1948 年にユダヤ人国家イスラエルが建国されたが、アラブ連盟はこれに反発し、第一次中東戦争が起きた。この戦争を経た後もイスラエルは独立を保ち、パレスチナから追放された 100 万人以上の人々が難民となった。イスラエルは支配領域を拡大し、当初国連管理となっていたエルサレムも支配するようになった。

1991 年のマドリード中東和平会議をはじめとして、パレスチナとイスラエルはアメリカを仲介役とし、和平交渉を始めた。1993 年のオスロ合意では、パレスチナ暫定自治政府の樹立や相互承認などの進展が見られた。しかし近年は、イスラエルが国際法に違反し、グリーンライン⁵を超えて分離壁や入植地の建設を進め、パレスチナ側の反発を招いている。そうした強硬姿勢を示すイスラエルに対し、パレスチナ市民はインティファダ⁶とよばれる抵抗運動を起こしたこともあった。

このように、私が訪れたエルサレムとベツレヘムは、世界的宗教が生まれた場所・聖地であると同時に、パレスチナ問題の中心舞台でもある。

Ⅲ．旅行の日程

前述の通り私は、2018 年 3 月 29 日から 4 月 5 日にかけてイスラエル・パレスチナを旅行した（出国日・帰国日含む）。イスラエルでは、エルサレムに到着し、その日は、宿泊先が主催する無料のウォーキングツアーに参加し、「嘆きの壁」でお祈りをした。2 日目は旧市街とその周辺を観光し、聖墳墓協会やダビデの塔、スーク、オリブ山などを訪れた。3 日目は午前中に神殿の丘の「岩のドーム」を訪問し、午後から路線バスでパレスチナに向かい、夕方、宿泊先ホテル主催のツアーに参加した。4 日目は午前中ベツレヘムの観光をした後、お昼からイスラエル側からのパレスチナ問題を扱ったツアーに参加した。5 日目はマサダ国立公園を訪問し、夕方、前日に知り合った日本人の元を訪ねた。以上の行程を表 2 にまとめる。

表 2 イスラエル・パレスチナ旅行の行程

日付	日程	訪問場所
3/29 (木)	日本出国 機内泊	
3/30 (金)	エルサレム到着 宿泊先主催の無料のウォーキングツアーに参加 宿 泊：The Post Hostel Jerusalem	・旧市街 ・嘆きの壁
3/31 (土)	旧市街、およびその周辺散策 宿 泊：The Post Hostel Jerusalem	・聖墳墓教会 ・ダビデの塔 ・スーク→ダマスカス門 ・シオンの丘 ・オリブ山
4/1 (日)	午前：エルサレム観光 午後：ベツレヘム（パレスチナ）観光 夕方：宿泊先ホテル主催のツアーに参加 宿泊：The Walled Off Hotel	・神殿の丘（岩のドーム） ・新市街 ・分離壁、監視塔 ・地元の人たちの墓地 ・アイダ難民キャンプ

4/2 (月)	午前：ベツレヘム観光 午後：Green Olive Tours のツアーに参加 宿泊：The Walled Off Hotel	・ベツレヘム旧市街 ・聖誕教会 ・Palestine Heritage Center ・東エルサレム ・分離壁 ・入植地 ・オリーブ山
4/3 (火)	午前：パレスチナからイスラエルへ移動。その後マサダ国立公園を観光 夕方：エルサレム ・テル・アビブへ移動 宿 泊：HI Tel Aviv Bnei Dan Hostel	・イスラエルのチェックポイント ・マサダ国立公園 ・前日に紹介されたエルサレムに住む日本人宅を訪ねる
4/4 (水)	イスラエル出国 機内泊	
4/5 (木)	日本に帰国	

この中でも特に印象に残ったのは、パレスチナ問題をテーマとした The Walled Off Hotel (ウォールド・オフ・ホテル) のデザインや同ホテルの主催のツアー、Green Olive Tours (グリーン・オリーブ・ツアーズ) 主催のツアーである。これらについては、その他のパレスチナ問題について旅行中に感じたことも併せ、次章でさらに詳しく述べることとする。

IV. イスラエル・パレスチナでの体験

1. The Walled Off Hotel

The Walled Off Hotel はヨルダン川西岸のパレスチナ自治区に位置している。イギリスの路上芸術家で覆面アーティストのバンクシーが出资し (共同通信, 2017)、2017 年 3 月に開業した。ウォールド・オフとは「壁で囲まれた」という意味である。



図 2 The Walled Off Hotel と分離壁 (筆者撮影)

このホテルは、道路を隔てて分離の壁に面していることを売りにし (図 2)、「世界一眺めの悪いホテル」と称している。ホテルの内装や設備もパレスチナ問題をテーマにデザインされて

おり、その意匠が随所に見られた。

まずホテルの入り口では、黒のスーツとシルクハットを着用した男性が出迎えてくれた。そこにあった赤い円筒形の帽子に赤いジャケットを羽織った猿の置物もまた、この男性と一緒に客を歓迎してくれているように感じた。出迎えの男性の服装は正統派ユダヤ教徒のように見え、猿の置物の格好はムスリムのように見えた。

中に入るとフロントとロビーが広がっている。受付時にはウェルカムドリンクが提供される。そこで受け取るルームキーは分離壁を模した大きなキーホルダーのようなものに取り付けられている。ロビーの壁にはバンクシーの作品がいくつも飾ってあった。これらは、パレスチナの子供たちが監視塔から伸びたロープで遊んでいるところや花束を投げつけようとする若者、ガスマスクをつけ催涙ガスから身を守るダビデの彫像、酸素マスクをつけたキュービットたち、いくつもの監視カメラの模型などが描かれていた。ひとりでメロディを奏でるピアノも置いてあった。ロビーの大きな窓の外には分離壁が立ちはだかっている。私は、翌朝このロビーで朝食を食べることになった。



図 3 ロビーの展示物 (筆者撮影)



図 4 ロビーから眺める分離壁 (筆者撮影)

ロビーの奥には階段があり、二階に登ることができる。そこには地元のアーティストの美術作品が展示されている。その階段

を上らずにさらに奥へ進むと小さな展示室が設置されていた。その入り口には動くバルフォア元英外相⁷の模型が置いてある。その展示室ではガザ地区でのパレスチナ軍とイスラエル軍の衝突やその歴史などが資料を用いて紹介されている。そこでは、パレスチナがいかに不公平な状況におかれているのかが訴えられている。

ロビーの片隅には本棚が壁に埋め込まれているように置かれ、実はそれが客室への扉になっている。その扉の脇に小さな「ミロのヴィーナス像」があり、そのヴィーナス像の腹部にルームキーの分離壁部分をかざすと、ヴィーナス像の胸が赤く光って扉が開く仕組みとなっている。

このホテルの各部屋はバンクシーなどの様々なアーティストによってデザインされており、ロビーも含め建物全体がインスタレーション⁸そのものとなっている。ほとんどの部屋からは分離壁と監視塔が望むことができ、3階の部屋からは分離壁内部のイスラエルの入植地や分離壁で囲まれたパレスチナの民家を眺めることができる。私は、このホテルで2泊し、1泊目はこのホテルの中のもっとも廉価なドミトリ形式の部屋「Budget Barracks」、2泊目にグレードの高い「Scenic Suite」という部屋を利用した。



図5 バンクシーがデザインした客室（筆者撮影）

ホテルのサービスとしては、最初に紹介したウェルカムドリンクのほかに、朝食が料金に含まれている。デイナーや軽食はフロントに決められた時間までに伝え、追加料金を払うことを承諾すれば用意してもらえる。電気や水も自由に使えるが、「パレスチナはそうした資源が不足しているので大切に使ってほしい」というような注意書きがところどころにある。

ホテルの隣には二つの店舗が接しており、一軒は分離壁に「落書き」できるように用具をそろえている店、もう一軒はバンクシーの作品やパレスチナの民芸品などを扱った土産物店となっている。

ホテルの利用客については、彼ら彼女らとの会話から、イギリス、スペイン、アメリカなどから来ていることが分かった。その多くが一人ないし二人で訪れていた。ロンドンから来た方々

だけ親子連れだった。従業員はもっぱら地元の人々だ。また、近隣の人々との会話から、地元ではこのホテルの存在が好意的に受け止められていることが分かった。

ホテル全体がパレスチナ側のメッセージを発するアート作品であり、そこには主に欧米からの人々が集まっていた。

2. パレスチナ問題を扱ったパレスチナ側のツアー

私がパレスチナで宿泊した The Walled Off Hotel はパレスチナ問題をテーマとしたウォーキングツアーも主催しており、ホテル予約時あるいは到着後にフロントで申し込むことができる。ツアーは、1日2回（午前と午後各1回）行っている。ガイドは地元住民やボランティア団体「Volunteer Palestine」のスタッフが引き受けている。

私が参加した4月1日の午後のツアーの参加者数は約10名だった。生まれも育ちもベツレヘムという年配の男性ガイドが説明しながら参加者を案内し、分離壁・監視塔、地元の人々の墓地、アイダ難民キャンプの順に回っていった。



図6 ツアーの様子（筆者撮影）



図7 アイダ難民キャンプの街並みとサッカーをする子供たち（筆者撮影）

分離壁・監視塔と墓地では、パレスチナが置かれている理不尽な状況、イスラエル軍が今までパレスチナに対してとってきた残虐な行為について、ガイドが怒りを帯びた熱い調子で語った。一方で、ガイドは始終気さくな態度をとり、説明の合間には笑顔が多かったのも印象的である。彼はまた、我々観光客や分離壁に描かれた「分離壁アート」を指差して、インティファダの時代とは違う新たな時代のメッセージの伝え方であることを力説していた。

アイダ難民キャンプでは、ボランティア団体のスタッフが案内してくれた。「難民キャンプ」とは言うものの、そこは住宅や学校などが立ち並ぶ「小さな街」のようであった。イスラエルの入植地の門から難民キャンプまで道路がのびており、「以前ここで衝突が起きて大勢の人が亡くなった」、「長らくここでボランティア活動をしていていた方が衝突に巻き込まれて亡くなった」という話など、暗い話題が続いた。他方では、地域の女性が作った民芸品や、打ち込まれた砲弾を加工した楽器やキーホルダーの販売が行われているという、たくましさを感じさせる場面もあった。また、キャンプ内には設備の整ったフットサルコートがあり、大人たちがフットサルで大いに盛り上がったり、道端で子供たちがサッカーに興じたりという平穏な日常を感じさせる一面も見ることができた。子供たちは我々外国人に積極的に話しかけ、時にサッカーボールをパスしてコミュニケーションをとってきた。

パレスチナ問題の理解を深めるための説明のみならず、実際にそこに暮らす人々のリアルな感情や日常の雰囲気に触れることができたツアーだった。

3. パレスチナ問題を扱ったイスラエル側のツアー

前節で説明したように、The Walled Off Hotel は、パレスチナ側でパレスチナ問題を扱ったツアーを開催しているが、イスラエル側にあるパレスチナ問題を扱ったツアーへの参加も推奨している。そうしたツアーとして、ホテルのホームページや予約時のメールで勧められるのは、イスラエルのツアー会社「Green Olive Tours」が催行している「Greater Jerusalem Tour」（グレート・エルサレム・ツアー）である。このように The Walled Off Hotel と Green Olive Tours は協力関係にあり、Greater Jerusalem Tour の参加者の集合場所の1つとして The Walled Off Hotel が指定されている。

私が、このイスラエル側のツアーに参加したのは、パレスチナ側のツアーに参加した翌日（4月2日）の午後である。その日はパレスチナ側に滞在していたため The Walled Off Hotel から参加したが、当日のツアー参加者11名の中でこのホテルから参加したのは私だけであった。他の参加者はエルサレムもしくはテル・アビブから参加しており、全員欧米圏からの旅行者であった。



図8 ツアーの様子（筆者撮影）

ツアーでは、エルサレム市街地のレストラン付近で全員が集めた後、大型のバンに参加者とガイド、運転手があり、目的地で下車して様子を見たりガイドの説明を聞いたりした。ツアーでは、まず東エルサレムを通って分離壁へ向かい、イスラエル側からラマッラを眺められる高台に行った。その後イスラエルの入植地およびパレスチナとの境界付近を訪れ、最後にエルサレムのオリーブ山で終了した。この行程は、事前に伝えられていたものとは異なっており、チェックポイントや一部入植地への訪問は省略されていた。

ツアー中は、ガイドが移動中の車内も含め、車窓から見える景色や建造物、目的地、イスラエル・パレスチナ双方の状況の違いについて多くの説明をしており、それに参加者が耳を傾ける時間が長かった。このツアーは「パレスチナ問題に関する知識をさらに広げたい人」を対象としているためか、どういう経緯で今の状況になっているか、生活はどのように行われているかについて詳細な説明がなされた。ラマッラを望む高台では、ガイドがイスラエルとパレスチナの境界が形成された経緯や、イスラエルがグリーンラインを超えてパレスチナ側に分離壁や入植地を築いていることを、地図を用いて解説していた（図8）。

イスラエルの入植地では、すぐ目の前に分離壁やパレスチナ人居住地がある場所で車を止め、パレスチナ側とイスラエル



図9 入植地から眺めるパレスチナ人居住地
左手前に入植地、写真の奥にパレスチナ人居住地があり、写真中央に分離壁が通っている（筆者撮影）

側の暮らしをわかりやすく比較して見せた。オリーブ山では、とくにパレスチナ問題には触れられず、エルサレム旧市街を一望できる有名な撮影スポットというだけあって、各々の参加者が熱心に写真撮影をしていた。

ツアー中、ガイドにこのツアーの目的を訪ねたところ、それは「とにかくパレスチナ問題について知ってもらいたい」ということだった。

4. 旅行中に感じたパレスチナ問題

旅行中、他の観光地では感じたことのない、「この地域は国際的な紛争が存在している」ということを意識させられる場面が度々あった。とはいえ、外国人旅行者としてこの地を観光するにあたっての大きな支障はないということは、あらかじめ指摘しておきたい。これから述べるように、旅行の際の留意点はいくつかあるが、それらを守っていれば危険を感じることなく観光することができる⁹。

エルサレムは世界中から大勢の巡礼者や観光客が訪れる聖地であり観光地である。そうした外部からの訪問者がよく訪れる場所として、旧市街と新市街がある。旧市街は城壁で囲まれた市街地であり、中には嘆きの壁や聖墳墓教会、神殿の丘、岩のドームなどの、ユダヤ教、キリスト教、イスラームの聖地や宗教施設が多く存在している。また、多数の土産物店や飲食店、宿泊施設、民家などが所狭しと立ち並んでいる。新市街は旧市街の西側に広がっており、ショッピングモールや商業施設、宿泊施設などが存在している。中心部にはライトレールが東西を貫いている。

そのようなエルサレム旧市街・新市街を観光中に気がつくのは、イスラエル軍の兵士や警察官の多さである。とくに兵士に関しては、機関銃のような大きな兵器を肩からぶら下げ、街を巡回したり、交差点付近で集まって談笑したりしていた。また、旧市街においてはムスリムかどうかによって移動が制限されているエリアがあり（地図上でどの部分がそれに該当するのかは不明）、そうした箇所に柵を設けて人々を取り締まっていた。他方では、観光客に道を尋ねられて道を教えているという光景も目にした上、私自身、兵士に道を案内してもらったこともあった。

手荷物への警戒が厳しいこともこの地域の特徴として挙げられるだろう。バスターミナルや嘆きの壁、神殿の丘に立ち入るときは身体チェックや手荷物検査が行われる。日本のイスラエル観光情報誌は、手荷物を置きっ放しにしないよう注意を促している。これは、テロ対策の一環として、持ち主が不明な荷物は早々に処分されてしまうからだという。

次に、イスラエルとパレスチナの間の移動について述べたい。移動の可否やその自由さの度合いは観光において極めて重要な問題である。イスラエルからパレスチナ自治区に入る際は、特にチェックポイントや検査はなく、私は旅行中に二度イスラエルからパレスチナに入ったが、どちらも気づかないうちにパレスチナ自治区に着いていた。

反対に、パレスチナからイスラエルへ行く際は、車両も人も

必ずチェックポイントを通過しなければならない。私の一度目のチェックポイントの通過は4月2日のツアーの際に、ツアー会社のバンに乗車していたときのことだった。当時乗客は私一人で、イスラエル軍の兵士がバンの開いたドアから顔を出し、私にパスポートの提出を求めた。私のパスポートを確認した兵士は、笑顔で「旅を楽しんで!」と言い、身元確認は終了した。イスラエル人の運転手は何もチェックされなかった。

二度目のチェックポイントの通過は、パレスチナから帰路に就くときのことだった。このときは徒歩で通過した。チェックポイントは徒歩で通過する場所と車両が通過する場所とは完全に分けられており、距離も少し離れたところにあった。チェックポイントの左右に分離壁が続いており、さながら城門のようであった。まずは長い通路を抜け、次に手荷物検査や身体検査を受け、最後に指紋とパスポートを確認される。一連の確認や検査はイスラエル軍の兵士によって行われていた。外国人旅行者である私は簡単に通過することができたが、最後の指紋・パスポート確認のエリアで、担当する兵士とパレスチナ人と見受けられる人たちがもめているのを目撃した。

イスラエル・パレスチナ間の移動は、要所ごとにチェックを受けるが、外国人旅行者としては特段問題もなく通行可能だった。一方、道中出会ったパレスチナ人たちは口をそろえて、このイスラエルによる移動の管理に不満を漏らしていた。

V. 旅行を通して感じたパレスチナ問題と観光の関係

ここでは前章までに記した旅行体験から考えられることを述べる。

まず、The Walled Off Hotel について、このホテルに宿泊客として滞在することにより、パレスチナ問題に対するパレスチナ側の立場を共感的に理解できた。ホテル内では、展示室を除いてはパレスチナ側の政治的立場を明確に説明したものはなかった。しかし、ロビーや客室などのデザインや装飾、ホテル全体の提示の仕方にパレスチナ問題に対する皮肉が込められており、これにより我々観光客はパレスチナ側の抗議や苛立ちを感じとることができた。さらに印象深かったのは、このホテル主催のツアー・ガイドが、外国人観光客やパレスチナの観光アトラクションとなった分離壁アートについて新たな時代のパレスチナの立場を発信する手段になったと述べていたことである。こうした暴力を使わない政治的主張が観光客を引き寄せ、また観光客の存在がこの新たな発信手法を効果的なものになっていると考えられる。

次に、パレスチナ問題を扱ったパレスチナ側からのツアーとイスラエル側からのツアーについては、どちらもパレスチナ住民の苦しい生活に言及していた。しかし、ツアーの行程を通して参加者が得られる現地の生活感は、パレスチナ側からのもののほうが強かった。それは、ウォーキングツアーという形式により、歩きながら道行くパレスチナ人と言葉を交わしたり、難民キャンプの中に入って住民と触れ合ったりすることが可能だったことに

起因すると考える。一方のイスラエル側からのツアーでは、実際に住民と言葉を交わすような機会はなかったが、ガイドが資料等を用いて事細かに説明しており、事実や状況に関する説明の説得力が強い印象を受けた。

いずれのツアーにおける取り組みも、観光の中身や参加者として受けた印象に多少の違いはあるが、この地域を訪れる外国人観光客にパレスチナ問題への関心を高め、理解を深めさせるという点で共通しており、ある程度の効果もあるように感じた。実際、ツアーの参加者やホテルの宿泊客は、ガイドやホテルの従業員と積極的にコミュニケーションを図り、この紛争について理解しようとしている姿が何度も見られた。また、子供連れでホテルを訪れていた家族は、親が子にホテル内の展示を真剣な表情で説明しており、端から見ていてさながら「社会科見学」のようであった。パレスチナ問題という世界史上最大級に複雑で大きな国際紛争を、観光を通して一般観光客に身近に感じさせ、現場にアクセスしやすくするという働き、これらの取り組みに認めることができる。

しかしながら、The Walled Off Hotel やパレスチナ側・イスラエル側からのツアーのいずれにおいても、宿泊客や参加者はみな外国人旅行者だった。そのため、中東和平を目指す際によく語られる、紛争当事者つまりイスラエル人とパレスチナ人との間での「相互理解」につながっていくとは考えにくい。この紛争当事者間での観光を通じた交流の有無については、他のツアーの実施状況を確認する必要があるが、少なくとも私が見た限りでは、このツアーには両地域の住民の参加者はいなかった。

イスラエル・パレスチナの観光を取り巻く環境についても述べておきたい。エルサレムでの細かな手荷物への検査や兵士・警察官の多さなどから、イスラエル当局がこの場所での治安の維持にかなり神経を使っていることが伺えた。不安定な情勢の中で安全を保ち続けようとする当局の取り組みは、パレスチナ側にとっては必ずしも望ましいことではないかもしれないが、外国人旅行者にとっては安心感をもたらす一要因にもなっていたように感じた。

VI. おわりに

イスラエル・パレスチナの地への旅を決めたとき、外務省からもたらされる情報やインターネット上の情報をもとに「安心して旅行ができる」と自分に言い聞かせてはいたが、それでも出発前には紛争というイメージが先行するこの地への訪問に強い不安と緊張を覚えていた。この旅のことを伝えた友人たちからも「危ない」「怖い」ということは幾度も言われた。しかし、これまで述べてきたように、実際に訪れてみるとイスラエル・パレスチナは世界中から巡礼者や観光客が集まる聖地であり観光地であった。治安維持のための監視や検査が他の観光地よりもはるかに高かったり、移動の自由が一部制限される場面もあったりしたが、私にとっては、それによって観光で得られる

満足感が減退することはなかった。むしろ、そうした特殊な事情を抱えた地域であることを念頭においたことによって、日本から離れ、自分に関心を持った「パレスチナ問題」の中心舞台を旅しているという感覚はより強いものになったかもしれない。

観光が紛争の状況改善に貢献しているのかという問いをはじめに立てたが、これにイエスカノーで答えるのは難しい。現在パレスチナ問題と絡めて行われている観光の取り組みはまだ新しいものであり、これが問題解決に対してどう働くのかは見通せない。ただし、観光を使って自らの主張を伝え、そこに苦しい状況からの脱却への希望を見いだしているパレスチナ市民の姿が垣間見えた。また、問題の現状を詳しく知ってもらうために観光を活用するイスラエル人の姿もあった。彼らの活動は国際紛争に絡めた観光の動きとして注目に値するものだろう。

注

- 1 ヘブライ人とは他民族による呼び名で、彼ら自身はイスラエル人と称した。バビロン捕囚後はユダヤ人と呼ばれることが多い。
- 2 ローマ帝国に対するユダヤ民族の解放闘争。
- 3 フランスのユダヤ系軍人ドレフュスが、ドイツのスパイであるという容疑で逮捕された事件。実際にはスパイでなかったことから、冤罪とみられている。
- 4 ユダヤ人のパレスチナ復讐運動。
- 5 第一次中東戦争での停戦合意ライン。
- 6 圧倒的な武力を持つイスラエル軍に対し、パレスチナの人々は石を投げて抵抗の意思を示した。
- 7 第一次世界大戦期に、パレスチナにおけるユダヤ人国家建設の支持を明らかにした（バルフォア宣言）人物。
- 8 現代美術の手法の一つ。作品を単体としてではなく、展示する環境と有機的に関連付けることによって構想し、その総体を一つの芸術空間として呈示すること。また、その空間（小学館、2016）。
- 9 現在の状況では観光客の安全は比較的良好に保たれているが、情勢の変化の仕方によっては危険になりうる。

参考文献

- 外務省（2018a）「イスラエル基礎データ」最終閲覧日 2018 年 10 月 1 日 <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/israel/data.html>
- 外務省（2018b）「パレスチナ基礎データ」最終閲覧日 2018 年 10 月 1 日 <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/plo/data.html>
- 共同通信（2017、3 月 20 日）「『世界一眺めの悪いホテル』パレスチナで開業」『日本経済新聞』最終閲覧日 2018 年 10 月 3 日、https://www.nikkei.com/article/DGXLASDG21H0Q_R20C17A3000000/
- 太田瑞穂．（2017、5 月 5 日）「ヨルダン川西岸、境界線の向こう側で人々の暮らしに触れる イスラエル（4）」『朝日新聞』最終閲覧日 2018 年 10 月 3 日、https://www.asahi.com/and_travel/articles/SDI2017050249201.html
- 小学館（2016）『デジタル大辞泉』。
- 高松郷子（2015）「パレスチナにおけるコミュニティ・ツーリズムの展望―被占領地の境界浸食に抗して」『境界研究』5、99-129。
- 立山良司（2001）『エルサレム』新潮社。
- UNWTO, History | World Tourism Organization UNWTO. 最終閲覧日 2018 年 10 月 3 日 <http://www2.unwto.org/content/history-0>
- 白杵陽（2013）『世界史の中のパレスチナ問題』講談社。

受理日 2018 年 11 月 28 日